

第121回

「ひとりGS」だった、  
ジュディ・オング10代の足跡

私が中学生になった昭和39年、東京五輪開催の頃までは中国と言えば台湾が頭に浮かび、代表する人物といえば王貞治とジュディ・オング、あえて加えれば十種競技の東洋の鉄人・楊伝広くらいだったように記憶します。

ブラウン管の中のジュディ・オングを初めて見たのは、昭和36年からフジテレビで放送されていたドラマ『三太物語』で「花子」役を演じている姿でした。私より2歳年長のジュディは当時11歳、小柳徹が歌う主題歌『俺あ三太だ』の中では「あたいは花子」という台詞をかわいらしい声で聞かせてくれました。

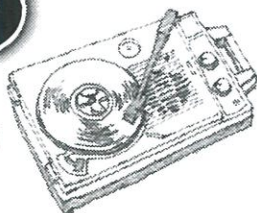
学研の『6年の科学』の表紙などにも登場し、すっかりファンになった私は、その後も彼女に注目、ホームドラマ『グーチョキパー』や、司会・鈴木やすしのアシスタント役だった『勝ち抜きエレキ合戦』など、フジテレビ系の番組を楽しみにしていました。

東京五輪後の翌年はシルビー・バ

ルトンが歌った『アイドルを探せ』が大ヒットし、日本の若者に「アイドル」という言葉を認知させてくれ

名曲カルテ

昭和歌謡と  
いままで



堀井六郎  
絵 松本浦

た時期でもありますが、アイドルにふさわしかった容姿と「ジュディ」というカタカナ表記に魅せられた「隠れジュディ・ファン」がかなり存在していたはずです。

新たなスターを探すのに目ざとい興行界は、昭和41年3月公開の日活歌謡映画『青春ア・ゴーゴー』で、主演の山内賢の相手役にジュディを起用、劇中で結成されたエレキバンド「ヤング&フレッシュ」をバックに、主題歌（作詞・青島幸男）やジン・ヴィンセントのロックンロールナンバー『セイ・ママ』を歌う姿は躍動感に富み、劇中とはいえ、楽しそうに歌う笑顔が輝いていました。

映画公開2か月後の同5月、『星と恋したい』でコロムビアからレコードデビュー、翌昭和42年にリリースされたシングル第4、

第5弾の『たそがれの赤い月』『夕陽の恋』をあらためて聴いてみると、そこにはまさに「一人女性GS」の世界が展開されていて、黛ジュンや1年後にデビューするピンキーとキラーズに歌わせたかったと思わせて

くれます。

ちょうど、ブルー・コメッツの『ブルー・シャトウ』がブレイクし、TBSの朝の番組『ヤング720』（ジュディも一時、司会を担当）には、デビュー前後のGSバンドが相次いで登場してくるような時代でした。ジュディの初期作品群の作詞を担当していたのは、白鳥朝詠こと白鳥隆一、本業はフジテレビのプロデューサーでした。

作曲は演歌畑の市川昭介で、すでに島山みどりや都はるみのメイン作曲家として知られていましたが、同じ門下生だったジュディのために市川なりのエレキ歌謡を提供しました。

私のお気に入りではありますが、これは市川の引き出しの広さというより、まだ当時のGSソングが、メ



ロディは旧態依然のままエレキギターという味付けによって簡易的に仕上げられたものだという証でもありません。『魅せられて』がジュディの代表作であることに異存はありませんが、彼女が10代だった頃の足跡もまた、私は高く評価しています。